

善を基礎づけるもの
——神か自然かそれとも人間か？

石崎嘉彦（大和大学）

この提題は、倫理学がなお「超越的なもの」を必要としているのか、あるいは、われわれは「善」の観念なしに道徳を語りうるのか、という問いに答えようとしてめぐらせた思考の一部である。このような問題を考えてみようと思いついたのは、このシンポジウムの「趣意書」に触発されたことによる。シンポジウムの立案者が、「神の死」が口にされる中にありながらこれまでも常に「神」に関する問題を問うてこられていることから、このテーマが、「形而上学」や「倫理学」あるいは「道徳」が置かれている窮状に一石を投じようとするものであることは容易に察しがつく。そこで、私としても、それに便乗して、善を基礎づけるものについて、何らかのことを提言できるのではと考えた次第である。

提題者と司会者による最初の会合の後品川氏が送ってくれた論考から、このシンポジウムのテーマに関して、氏にはかなり突っ込んだ考察を物されていることを知ることになったが、とり分け、私は、「宗教は哲学にとって依然として問題か、問題であるとするれば、いかにしてか」という論題に強く惹きつけられた。その問題に対する氏の答えはかなり明快なものであって、前半の「依然として問題か」に対する答えは「然り」であり、後半の問い「問題であるとするれば、いかにしてか」に対する答えは「宗教が刺激する形而上学的な思索は哲学にとっても無視できないものである」というものであった。要するに、「超越的なもの」についての思考である形而上学的思惟は、「哲学」とともに、価値の基礎づけにとって必要不可欠である、ということになる。

ところで、私には、その答えが、これまで馴染んできたレオ・シュトラウスが引き出した答えとかなり似たものであるように思われた。彼もまた、「理性」を「啓示」と対質させることが哲学的思惟にとって肝要であると主張しているのもであって、「神」が存在するのか存在しないのかはともかく、その問題を思考することそれ自体が、哲学的思惟にとって肝要であると述べているからである。

「宗教」あるいは「超越的なもの」が神なき世界にも必要であることを説く品川氏と、神学からの挑戦を受けて立つことによって政治哲学の復権を試みるシュトラウスとでは、ともに近代的哲学の窮状を突破しようとして「超越的なもの」に意義を見出そうとする点では共通していながら、前者が「哲学」に対して「超越的なもの」の思考を刺激する「宗教」を対質させようとする試みであるのに、後者は「哲学」に対して「神学」を対質させようとする試みであるという点で、明らかに違いも存する。

その違いは、中世「哲学」の代表者トマスが『神学(Theologica)大全』を書いたのに宗教改革の立役者カルヴァンが『キリスト教(Christianae Religionis)綱要』を書いたことに象徴的に表現されている。両者の間には、「神学」と「宗教」の違いだけでなく、「古代的なもの」と「近代的なもの」との差異が存しているからである。ところが、「神学」に代わって「宗教哲学」が「超越的なもの」を扱うことになった近代の「哲学」では、却って、「超越的なもの」を否定するか、あるいはカントの「要請」が示すように「仮説的なもの」として受け入れざるを得なくなる。ここでは、かつて「神学」との対決をとおして「神的なもの」に独特の光を当てた「哲学」的思考を蘇生させることによって、近代以後の思考のなかで居場所を失くしてしまった「超越的なもの」の復権の可能性について考えてみたいと思う。

近代的な「神に向かう人間の態度の分析」という「宗教哲学」の視点からではなく、伝統的「哲学」が弃えていた「神の教理」としての神学の視点から「超越的なもの」の捉え返しの可能性を探ろうとする私の試みは、それゆえ、「超越的なもの」の認識を断念しながら「要請」という形でその復活を図った「宗教哲学」的試みを、それ以後の諸帰結もろとも、古典的哲学が残した哲学的合理性を復権させることによって克服する道を探ろうとする試みであることなる。